

いじめ被害からの回復とその要因に関する質的研究 —いじめを扱った学術論文・大学紀要論文における質的分析による検討—

亀田 秀子 (十文字学園女子大学人間生活学部)

会沢 信彦 (文教大学教育学部)

藤枝 静暁 (埼玉学園大学人間学部)

Qualitative Research on Recovery from Damage due to Bullying and Factors of Recovery : Consideration Based on Qualitative Analysis by Academic Theses and Theses in University Journals Dealing with Bullying

KAMEDA HIDEKO*, AIZAWA NOBUHIKO **

FUJIEDA SHIZUAKI ***

(*Jumonji University /**Faculty of Education, Bunkyo University/
*** Saitama Gakuen University)

要 旨

いじめ被害からの回復とその要因についての研究は、蓄積が少ない。そこで、「いじめ被害からの回復とその要因に関する基礎的研究(1)・(2)」を行ってきた。本研究では基礎的研究(1)・(2)から得られた「いじめ被害からの回復とその要因」に関する論文、13本を対象として、「回復できた・回復につながる」キーワードを抽出し、いじめ被害からの回復とその要因の解明を進めた。その結果、いじめ被害からの回復において、いじめられた体験から「安全を確保」し、自己開示によりソーシャルサポートを得て「心の整理」をし、自己と他者への「信頼感の回復」から「体験の肯定的な意味づけ」を経て、「自己成長感」を実感し、「心の傷の回復」へと至るプロセスが示唆された。

1. 問題と目的

近年、教育現場において、大津市中2いじめ自殺事件をはじめとした児童生徒の生命・身体の安全を脅かす事件が発生している。また、インターネット上の掲示板などを利用した特定の児童生徒に対する誹謗中傷など、「ネット上のいじめ」も深刻な問題となっている現状である。

いじめ防止対策推進法によれば、「いじめ」とは、「児童等に対して、当該児童等が在籍する学校に在籍している等当該児童等と一定の人的関係にある他の児童等が行う心理的又は物理的な影響を与える行為（インターネットを通じて行われるものを含む。）であって、

当該行為の対象となった児童等が心身の苦痛を感じているものをいう」と定義されている。

平成26年度「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」において、いじめの認知件数は、188,057件と依然と高く(文部科学省、2015)、憂慮すべき状況にあるといえる。いじめの態様のうち、パソコンや携帯電話等を使ったいじめは、7,898件(前年度8,788件)で、いじめの認知件数に占める割合は4.2%(前年度4.7%)である。

こうしたネットいじめは、ネットの匿名性の高さゆえに、加害者を被害者が特定できない場合が多く、通常のにじめにはない特徴を含むという指摘もある(黒川、2010)。また

ネットいじめは、その被害者に対して深刻な影響を及ぼすことも示されてきた。

いじめ被害者について、坂西（1995）は、いじめの被害者は対人恐怖、不安、抑うつ、不適応行動がみられると指摘し、深谷（2004）は、社会的退却傾向を身につけるようになっていくと報告している。

いじめを受けた時の対処法では、家族、教師そして友人への援助要請や加害者に反撃するなどの積極的な対処が重要であると指摘する（坂西、1995）。また、ソーシャル・サポートの重要性については久田（1987）も示唆しており、森下（1999）は、親や親友からのソーシャル・サポートを受けている人ほど、いじめの影響が少ないと報告している。坂西（1995）は、自己開示者はいじめられた経験の自己開示を通して、ソーシャル・サポートを得ることを指摘している。

以上のように、いじめ被害の影響については、様々な緩和要因が研究されてきたが、長期的ないじめ被害の影響とその緩和要因に関する研究は少ない。さらに、いじめ被害からの回復とその要因に関する研究はほとんどなされていない。

文部科学省の『生徒指導提要』によれば、いじめ問題の対応として「心の傷の回復に向けた本人への働きかけを行うと同時に、学校全体として社会性をはぐくむ取組」につなげていくことの大切さを示している（文部科学省、2010）。

亀田・相良（2010）は、過去のないじめ体験が青年期後期において及ぼす長期的影響として、「情緒的不適応」を示唆し、精神面でのケアの重要性、さらに心の傷の回復に向けた手立ての必要性を指摘している。

亀田・会沢・藤枝（2014、2015）は、いじめ被害からの回復とその要因に関する基礎的研究を行っている。「いじめを扱った学術論文の研究方法による分類」においては、いじめ被害からの回復とその要因に関する論文

は5本であり、「いじめを扱ったわが国の大学紀要論文の研究方法による分類」においては、8本であったと報告している。

本研究では、「いじめ被害からの回復とその要因に関する基礎的研究（1）・（2）」から得られた「いじめ被害からの回復とその要因に関する論文」13本を対象とし、いじめ被害からの回復の要因についての解明を進めることを目的とする。

心の傷を回復する要因として、香取（1999）は「信頼感の回復」、「プラス思考」、「心の整理」の3因子をあげている。また、Herman（1992）は、心的外傷からの回復過程の3段階として第1段階が「安全の確立」、第2段階は「想起と服喪追悼」、第3段階は「通常生活と再統合」であるという。いじめ被害からの回復に関しては、これらを参考に、いじめ被害からの心の傷の回復に関連する重要な語句・文章を抽出し、分析を進める。

2. 方法

いじめ被害からの回復とその要因に関する基礎的研究（1）・（2）から得られた「いじめ被害からの回復とその要因」に関する論文13本を対象とした。データ分析の方法は内容分析（コーディングとカテゴリー化）を参考に実施した。

いじめ被害からの回復に関する重要な語句・文章を抽出し、まず、「概念化」を図り、次に「カテゴリー化」、さらに、カテゴリーを“大きな項目”である「コアカテゴリー」としてまとめた。最後に「結果図」を示した。

本研究において「構成概念」は【 】で示し、抽出された構成概念は、1つの意味のある「カテゴリー」としてまとめ、カテゴリーを< >で示した。さらに、カテゴリーを“大きな項目”である「コアカテゴリー」としてまとめた。コアカテゴリーは、「 」で示した。分析は第一筆者が行い、第二筆者・第三筆者により更に検証・修正が行われた。

3. 結果

分析対象の論文13本は「分析対象の論文の概要」として表1にまとめた。13本をまず、「事例・実践研究」と「論説、レビュー」に分類した。事例・実践研究はさらにA：個人を対象とした事例・実践研究、B：集団を対象とした事例・実践研究、C：面接による調査研究で分類した。D：論説、レビューはA、B、Cをメタ分析したものと言える。し

たがって、本稿ではA、B、Cを主たる分析対象とし、Dは参考という位置づけの上で分析対象とした。

いじめ被害からの回復に関する重要な語句・文章、構成概念、カテゴリーの例一覧を表2にまとめた。尚、紙幅の関係で、1本の論文に対して、1つの例をあげた。結果図を示しているが、【構成概念】の後に記している、A-1-①について記述しておく。アルファ

表1 分析対象の論文の概要

	著者（発行年） 掲載誌、巻・号・頁	タイトル	研究方法 論文の分類
学 術 論 文	1 細澤仁（2004）、心理臨床学研究 第22巻、第3号、pp.240-249.	いじめを契機とする外傷後ストレス障 害の力動的的心理療法	事例研究（個人を対象） A-1：個人を対象とした事例
	2 鈴木純江・鈴木聡志（2006）、カウ ンセリング研究 第39巻、第1号、 pp.49-58.	いじめられ体験を持つ予備校生に対す るカウンセリング-エンパワメントの 観点から-	事例研究（個人を対象） A-2：個人を対象とした事例
	3 野口康彦（2007）、心理臨床学研究 第25巻、第5号、pp.539-549.	いじめを受けてきたアスペルガー症候 群の男子学生との4年間の面接過程- 学生期における心理的危機を中心-	事例研究（個人を対象） A-3：個人を対象とした事例
	4 鈴木純江・鈴木聡志（2008）、カウ ンセリング研究 第41巻、第2号、 pp.169-179.	いじめの被害者に対する支援-エンパ ワメントアプローチによるカウンセリ ング適用と検討-	事例研究（個人を対象） A-4：個人を対象とした事例
	5 亀田秀子・相良順子（2011）、カウ ンセリング研究 第44巻、第4号、 pp.277-287.	過去のいじめられた体験の影響と自己 成長感をもたらす要因の検討-いじめ られた体験から自己成長感に至るプロ セスの検討-	面接 C-1：面接による調査研究
大 学 紀 要 論 文	6 高野弘幸（2007）、京都光華女子大学 研究紀要 第45号、pp.187-210.	いじめ問題と子どもの心のケア	論説 D-1：論説、レビュー
	7 池島徳大（2009）、奈良教育大学教 職大学院研究紀要 学校教育実践教 育第1巻、第1号 pp.25-37.	いじめの学校教育臨床的支援に関する 一考察	論説 D-2：論説、レビュー
	8 伊東真理（2009）、吉備国際大学社 会福祉学部研究紀要 第19号、 pp.59-66.	いじめから心理症状を呈した思春期女 子の心理治療過程	事例研究（個人を対象） A-5：個人を対象とした事例
	9 小野淳・斎藤富由起・吉森丹衣子・ 飯島博之（2011）、千里金欄大学紀 要 第8号、pp.40-50.	中学校におけるサイバー型いじめの予 防と心理的回復を目的としたソーシャ ルスキル教育の試み その1-日本の 教育現場に適したサイバー型いじめ対 策システムに関する展望-	論説 D-3：論説、レビュー
	10 斎藤富由起・小野淳・守谷賢二・吉 森丹衣子・飯島博之（2011）、千里 金欄大学紀要 第8号、pp.59-67.	中学校におけるサイバー型いじめ予防 と心理的回復を目的としたソーシャ ルスキル教育プログラム開発の試み そ の2-日本の教育現場に適したサイ バー型いじめ対策の実践-	事例研究（集団を対象） B-1：集団を対象とした事例・実 践研究
	11 小野淳・斎藤富由起・社浦竜太・吉 森丹衣子・吉田梨乃（2012）、千里 金欄大学紀要 第9号、pp.21-28.	中学校におけるサイバー型いじめの予 防と心理的回復を目的としたソーシャ ルスキル教育プログラム開発の試み その3	事例研究（集団を対象） B-2：集団を対象とした事例・実 践研究
	12 橋本綾（2012）、山梨英和大学心理 臨床センター 心理臨床センター紀 要 第8号、pp.30-37.	リジリエンシーに関する一考察-いじ めからの回復の語り-	面接 C-2：面接による調査研究
	13 亀田秀子・会沢信彦・藤枝静暁 （2014）、文教大学教育研究紀要 第23号、pp.57-64.	いじめ被害からの回復とその要因に関 する基礎的研究（1）-いじめを扱っ た学術論文の研究手法による分類-	論説 D-4：論説、レビュー

表2 いじめ被害からの回復に関する重要な語句・文章、概念、カテゴリーの例一覧

論文No.	著者(発行年)	いじめ被害からの回復に関する重要な語句・文章(例)	【構成概念】	<カテゴリー>
A-1	細澤(2004)	セラピストにより彼女の退行が十分に受容された後、“新規蒔き直し”が起こった。	【受容からの新規蒔き直し】	<セラピストによる体験の受容>
A-2	鈴木・鈴木(2006)	いじめにあったことは、このところ大分自分の中で整理できてきて、人間不信から立ち直ってきたんです。	【人間不信からの立ち直り】	<心の整理>
A-3	野口(2007)	相手を思いやることが未発達なのかもしれない。4年生になってから強く思い始めた。この前のことを考えて、自分も嫌だと思った。深く考えてわかった。	【気づきと自己洞察】	<自己洞察>
A-4	鈴木・鈴木(2008)	夢の中だったけど、(中略)、私、本当は自分は仕返しをしてやりたいと思っていたんだってわかったんです。	【本心への気づき】	<気づきと自己主張>
A-5	伊東(2009)	自分の世界を広げ、友達と共通の話題を増やすよう努力をすることにした。	【自己調和】	<新たな自己に向って>
B-1	斎藤・小野・守谷・吉森・飯島(2011)	学校・家庭・地域(行政)のコラボレーションの枠組み。	【コラボレーション】	<教育プログラムの特徴>
B-2	小野・斎藤・社浦・吉森・吉田(2012)	第1・2学年ともに学校非公式サイトの被害報告はない。	【学校非公式サイトの被害報告なし】	<情報モラル教育の予防効果>
C-1	亀田・相良(2011)	学校・家庭での話しやすい関係の構築、部活の顧問の先生への相談、学校において教師との話しやすい関係の構築。	【学校・家庭での話しやすい関係の構築】	<話しやすい関係の構築>
C-2	橋本(2012)	レジリエンシーは、状況を捉える、働きかける。	【状況を捉える】 【働きかける】	<レジリエンス>
D-1	高野(2007)	Aは怒りと混乱にとりつかれたふうであったが、筆者が順に受け止め、整理をしながら聞いていく。しだいにAは落ち着きを取り戻していく。	【取り戻した落ち着き】	【自己開示】
D-2	池島(2009)	学校教師は、いじめられている子どもの立場に立たない限り、いじめられている子どもが心を開いて自分の辛い体験を語ろうとしない。	【いじめられている子どもの立場に立つ】	<いじめ介入の視点>
D-3	小野・斎藤・吉森・飯島(2011)	日本におけるサイバー型いじめの予防と心理的回復を目的とした対策実施では、行政機関・学校・専門家の協働システムを構築する。	【行政機関・学校・専門家の協働】	<協働システムの構築>
D-4	亀田・会沢・藤枝(2014)	いじめ被害からの回復においては丁寧な聴き取りによる調査が適している。	【丁寧な聴き取りによる面接】	<効果的な療法・面接>

ベットは、研究方法の観点による分類を示し、次の数字は、分類された論文の番号、最後の①は、【構成概念】の番号を示している。

4. 考察

1) A：個人を対象とした事例・実践研究

個人を対象とした事例・実践研究では、細澤(2004)、鈴木・鈴木(2006)、野口(2007)、鈴木・鈴木(2008)、伊東(2009)の5本の論文が該当した。コアカテゴリーは(3)、カテゴリーは(11)、そして構成概念は(35)にまとめられた。結果を図1に示した。

いじめ被害からの回復の要因としてのコア

カテゴリーは3つにまとめられた。1つ目は「安全の確保と自己への気づき」であり、2つ目は「心の整理と新たな自己への一歩」、そして3つ目は「信頼感の回復といじめ被害からの回復」である。

1つ目の「安全の確保と自己への気づき」であるが、まず、いじめられた体験から安全を確保するという<セラピストによる体験の受容>が行われている。【本心の吐露】ができたり、【自己中心性への気づき】を得たり、<気づきと自己主張>がみられる。語ることにより“気づき”が得られ、【自己主張】することで自己防衛能力が高まり、自己価値観

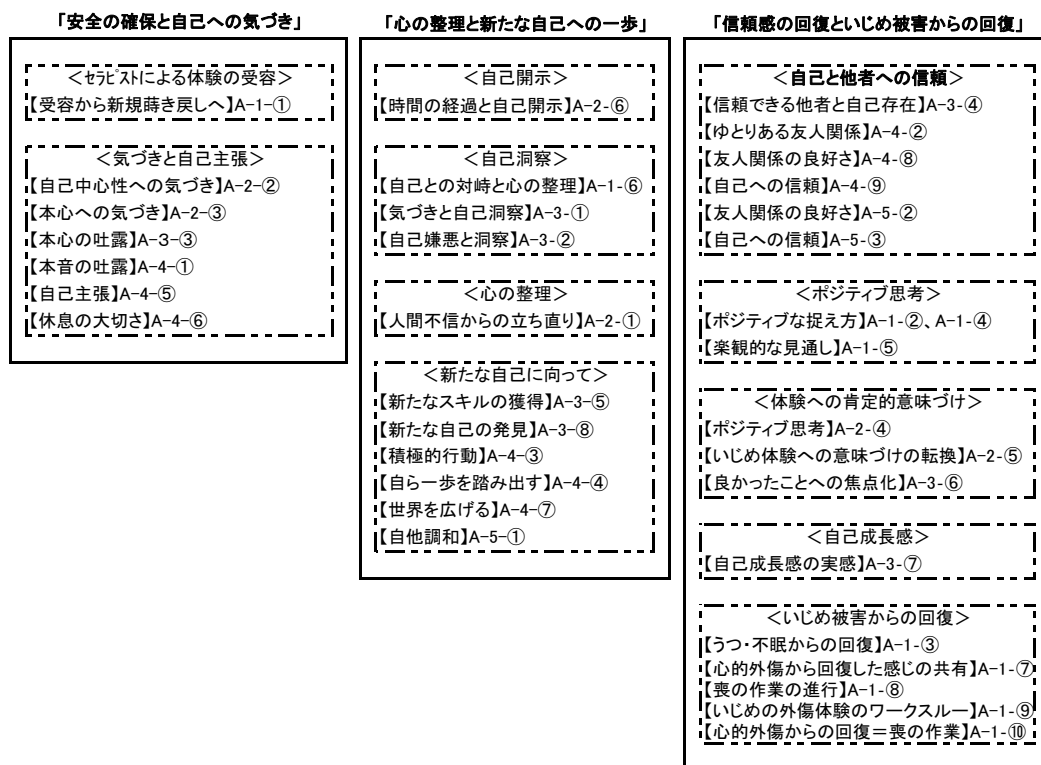


図1 A：個人を対象とした事例・実践研究

の回復が得られると考えられる。

2つ目の「心の整理と新たな自己への一步」であるが、まず、＜自己開示＞をすることで＜自己洞察＞を深め、＜心の整理＞ができる。さらに、【積極的行動】を取ったり、【新たな自己の発見】をしたり、＜新たな自己に向けて＞一步を踏み出すことが可能となる。

3つ目の「信頼感の回復といじめ被害からの回復」であるが、まず、＜自己と他者への信頼＞の回復が重要となる。【信頼できる他者と自己存在】から【自己への信頼】も深めていけよう。＜ポジティブ思考＞、＜体験への肯定的意味づけ＞ができるようになり、【自己成長感の実感】が得られる。そして、【うつ・不眠からの回復】が感じられ、【心的外傷から回復した感じの共有】が認識される等、＜いじめ被害からの回復＞へ至るものである。

いじめ被害からの回復に関する要因には、まず、「安全の確保」がなされることが重要であろう。カウンセリングや面接を通して、いじめられた体験を語ることにより、「心の整理」ができ、「信頼感」を回復していける。さらに、いじめられた体験を肯定的に意味づけすることができたり、自己成長感を実感できたときに、いじめ被害からの回復が期待できるということが示唆された。

2) B：集団を対象とした事例・実践研究

集団を対象とした事例・実践研究は、斎藤・小野・守谷・吉森・飯島（2011）、小野・斎藤・社浦・吉森・吉田（2012）の2本の論文が該当した。コアカテゴリーは（2）、カテゴリーは（5）、そして構成概念は（18）にまとめられた。結果を図2に示した。

いじめ被害からの回復の要因としてのコア

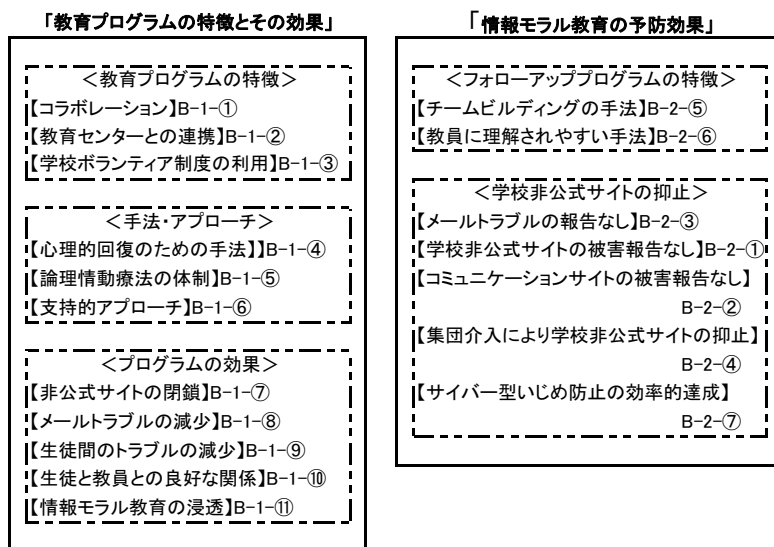


図2 B：集団を対象とした事例・実践研究

カテゴリーは2つにまとめられた。1つ目は「教育プログラムの特徴とその効果」であり、2つ目は「情報モラル教育の予防効果」である。

1つ目の「教育プログラムの特徴とその効果」であるが、まず、＜教育プログラムの特徴＞として、【コラボレーション】、【教育センターとの連携】、そして【学校ボランティア制度の利用】があげられた。連携をし、既存の制度の活用が効果をあげることが示唆されよう。

また、＜手法・アプローチ＞においては、【心理的回復のための手法】や【支持的アプローチ】が有効である。＜プログラムの効果＞として、【非公式サイト閉鎖】、【生徒間のトラブルの減少】、【生徒と教員との良好な関係】があげられた。

2つ目の「情報モラル教育の予防効果」では、【チームビルディングの手法】を用いて【教員に理解されやすい手法】が取られていることが＜フォローアッププログラムの特徴＞でもある。その結果、【メールトラブルの

報告なし】、【学校非公式サイト被害報告なし】等、＜学校非公式サイト抑止＞という効果を上げている。

いじめ被害からの回復の要因として、効果的な教育プログラムをつくりあげ、関係機関の連携のもと、心理的回復のための手法や支持的アプローチで、いじめられた子どもたちを支えていくことが重要となろう。また、メールトラブル・学校非公開サイトの被害報告の抑止が図れるならば、サイバー型いじめ防止へとつながり、情報モラル教育の予防効果が期待できるといえよう。

3) C：面接による調査研究

面接による調査研究は、亀田・相良(2011)、橋本(2012)の2本の論文が該当した。コアカテゴリーは(3)、カテゴリーは(14)、そして構成概念は(34)にまとめられた。結果を図3に示した。

いじめ被害からの回復の要因としてのコアカテゴリーは3つにまとめられた。1つ目は「関係性の構築といじめへの対処」、2つ目は

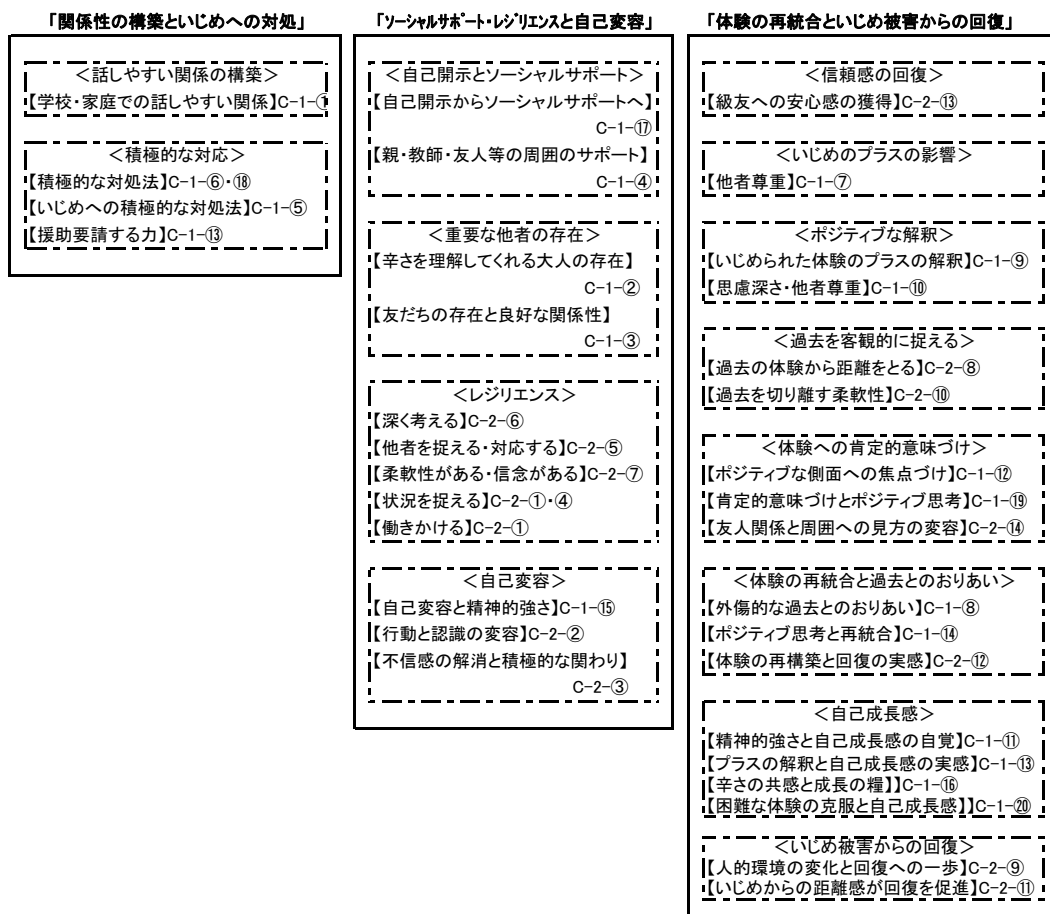


図3 C：面接による調査研究

「ソーシャルサポート・レジリエンスと自己変容」、そして3つ目は「体験の再統合といじめ被害からの回復」である。

1つ目の「関係性の構築といじめへの対処」では、【学校・家庭での話しやすい関係】の構築が大切であり、【いじめへの積極的な対処法】等、＜積極的な対応＞が求められる。

2つ目の「ソーシャルサポート・レジリエンスと自己変容」であるが、【自己開示からソーシャルサポートへ】、【辛さを理解してくれる大人が存在】等、＜重要な他者の存在＞がポイントとなろう。また、【状況を捉える】ことや【深く考える】等、個人の持つ＜レジリエンス＞も、いじめ被害からの回復に関連してくると考える。ソーシャルサポート

を得たり、個人の持つレジリエンスにより、いじめ被害から回復がしやすくなるであろう。さらに、＜自己変容＞も深まると考えられる。

3つ目の「体験の再統合といじめ被害からの回復」では、＜信頼感の回復＞を実感し、【いじめられた体験のプラスの解釈】や＜体験への肯定的意味づけ＞ができる。さらに、＜体験の再統合と過去とのおりあい＞へと進むことができる。【困難な体験の克服と自己成長感】から＜いじめ被害からの回復＞へと至ると考えられる。

いじめ被害からの回復に関する要因には、話しやすい関係性の構築が重要であり、自己開示をするなかで、ソーシャルサポートを得て、重要な他者の存在により、信頼感の回復

につながっていくものである。過去のいじめられた体験をポジティブに捉えることができるようになり、自己成長感も自覚でき、いじめ被害からの回復へと至ることが示唆された。

4) D：論説、レビュー

論説、レビューは高野(2007)、池島(2009)、小野・斎藤・吉森・飯島(2011)、亀田・会沢・藤枝(2014)の4本の論文が該当した。コアカテゴリーは(3)、カテゴリーは(13)、そして構成概念は(31)にまとめられた。結果を図4に示した。

いじめ被害からの回復の要因としてのコアカテゴリーは3つにまとめられた。1つ目は、「いじめ発生の阻止とピア・プレッシャーへの対応」、2つ目は「効果的な療法と必要な視点」、そして3つ目は「協働システムの構築と情報モラル教育」である。

1つ目であるが、いじめで傷ついた子どもたちが回復していくためにも、「いじめ発生の阻止とピア・プレッシャーへの対応」が重要となる。いじめは、「差異の協調」から始まり、【攻撃誘発性に対する理解と支援】は大切となる。また、【生徒にいじめのストーリーの提示】をするなど、<教師に必要な力>であり、【子どもの心の扉を開ける】には<教師の共感と受容>が何より、重要となる。

2つ目は、カウンセリングにおいて「効果的な療法と必要な視点」を押さえておくことが大切である。<自己開示>から<自己洞察>を深め、【新たな進路の発見】等をしたり、<新たな自己に向って>進むことができよう。

カウンセリングに<必要な視点>として、【エンパワメントの視点】や【言い返すことの勇気づき】等があげられる。

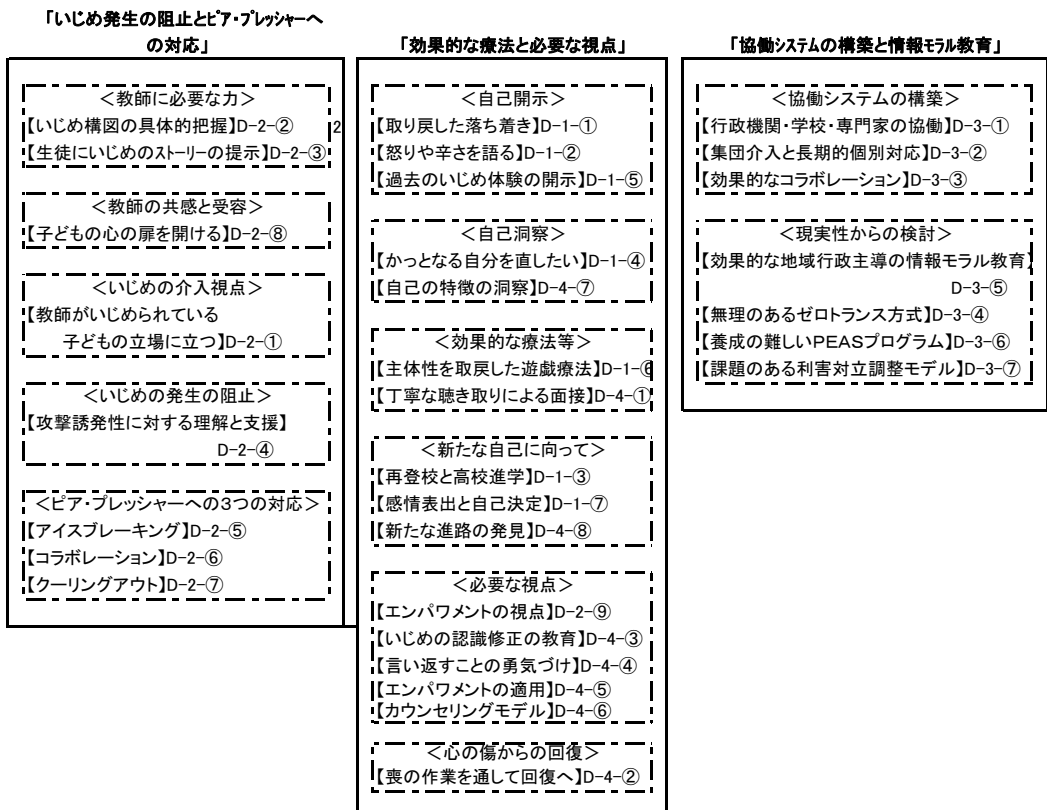


図4 D：論説・レビュー

3つ目は、「協働システムの構築と情報モラル教育」である。【行政機関・学校・専門家の協働】のもと、【集団介入と長期的個別対応】等の「協働システムの構築」が重要であることが分かる。ゼロトランス方式、PEASプログラム、利害対立調整モデルがあるが「現実性からの検討」を行うと【効果的な地域行政主導の情報モラル教育】が適している。

いじめ被害からの回復に関する要因には、学級集団の中での取り組み、個々に対応したカウンセリング、そして、協働システムの構築が重要であることが示唆された。

5) いじめ被害からの回復のプロセスの検討

いじめ被害からの回復のプロセスは、大きく3つの段階が考えられよう。第一段階は、いじめられた体験から「安全を確保」する段階である。家族や友人、教師等にいじめられた体験を自己開示する等、積極的な対処法が重要である。語ることにより、「気づき」や「自己主張」を通して、生活のリズムを回復し、自己防衛の能力を高め、自己価値観の回復を得ることができよう。

第二段階は、「心の整理」の段階である。自己開示により、ソーシャルサポートを得たり、重要な他者の存在に気づくものである。カウンセリング等を通して、自己洞察を深め、自己変容が期待できる。調整変数としての「レジリエンス」の関連も重要であろう。

第三段階は「信頼感の回復」と「体験の肯定的な意味づけ」の段階である。いじめられた体験をプラスに考えられるようになり、外傷的な過去との「おりあい」、そして再統合に至る段階でもある。未来を創造できるようになり、「自己成長感」を実感し、「心の傷からの回復」へと至る。

5. 今後の課題

いじめ被害からの回復とその要因についての論文は、わずかである。「いじめ被害から

の回復とは何か」という定義がなされている論文はなかった。したがって、研究者間での共通の認識と定義が求められると考えられる。また、分析から結果に至る過程の“分析の可視化”を図ることも課題であろう。

今後、この分野の研究が蓄積されることにより、いじめ被害からの回復を目指している人たちへのヒントとなることを願っている。

引用文献

坂西友秀「いじめが被害者に及ぼす長期的な影響および被害者間の自己認知と他の被害者認知の差」『社会心理学研究』、第11巻、第2号、1995、pp.105-115.

深谷和子「いじめの被害者に残る後遺症」『青少年問題』、第51号、2004、pp.10-15.

橋本綾「レジリエンシーに関する一考察—いじめからの回復の語り—」『山梨英和大学心理臨床センター 心理臨床センター紀要』、第8号、2012、pp.30-37.

Herman, J. L. Trauma and recovery. New York: Harper Collins, 1992. 中井久夫訳、『心的外傷と回復』、みすず書房、1996.

久田満「ソーシャル・サポート研究の動向と今後の課題」『看護研究』、第20号、1987、pp.170-179.

細澤仁「いじめを契機とする外傷後ストレス障害の力動的心理療法」『心理臨床学研究』、第22巻、第3号、2004、pp.240-249.

池島徳大「いじめの学校教育臨床的支援に関する一考察」『奈良教育大学教職大学院研究紀要 学校教育実践教育』、第1巻、第1号、2009、pp.25-37.

伊東真理「いじめから心理症状を呈した思春期女子の心理治療過程」『吉備国際大学社会福祉学部研究紀要』、第19号、2009、pp.59-66.

- 亀田秀子・会沢信彦・藤枝静暁「いじめ被害からの回復とその要因に関する基礎的研究（1）－いじめを扱った学術論文の研究方法による分類－」『文教大学教育研究所紀要』、第23号、2014、pp.57-64.
- 亀田秀子・会沢信彦・藤枝静暁「いじめ被害からの回復とその要因に関する基礎的研究（2）－いじめを扱ったわが国の大学紀要論文の研究方法による分類－」『文教大学教育研究所紀要』、第24号、2015、pp.67-76.
- 亀田秀子・相良順子「過去のいじめ体験が青年期後期においても及ぼす長期的影響－自己成長感を分かつ要因の検討－」『児童研究－聖徳大学児童学研究所紀要－』、第12号、2010、pp.13-20.
- 亀田秀子・相良順子「過去のいじめられた体験の影響と自己成長感をもたらす要因の検討－いじめられた体験から自己成長感に至るプロセスの検討－」『カウンセリング研究』、第44巻、第4号、2011、pp.277-287.
- 香取早苗「過去のいじめ体験による心的影響と心の傷の回復に関する研究」『カウンセリング研究』、第32巻、第1号、1999、pp.1-13.
- 黒川雅幸「中学生の電子いじめ加害行動に関する研究」『福岡教育大学紀要』、第59号、2010、pp. 11-21.
- 文部科学省『生徒指導提要』、2010
http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/22/04/1294538.htm.
- 文部科学省「平成26年度児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査等の概要」、2015
http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/27/10/_icsFiles/afieldfile/2015/11/06/1363297_01_1.pdf
- 森下正康「学校ストレスといじめの影響に対するソーシャル・サポートの効果」『和歌山大学教育学部紀要 教育科学』、第49号、1999、pp.27-51.
- 野口康彦「いじめを受けてきたアスペルガー症候群の男子学生との4年間の面接過程－学生期における心理的危機を中心に－」『心理臨床学研究』、第25巻、第5号、2007、pp.539-549.
- 小野淳・斎藤富由起・社浦竜太・吉森丹衣子・吉田梨乃「中学校におけるサイバー型いじめの予防と心理的回復を目的としたソーシャルスキル教育プログラム開発の試み その3」『千里金欄大学紀要』、第9号、2012、pp.21-28.
- 小野淳・斎藤富由起・吉森丹衣子・飯島博之「中学校におけるサイバー型いじめの予防と心理的回復を目的としたソーシャルスキル教育の試み その1－日本の教育現場に適したサイバー型いじめ対策システムに関する展望－」『千里金欄大学紀要』、第8号、2011、pp.40-50.
- 斎藤富由起・小野淳・守谷賢二・吉森丹衣子・飯島博之「中学校におけるサイバー型いじめ予防と心理的回復を目的としたソーシャルスキル教育プログラム開発の試み その2－日本の教育現場に適したサイバー型いじめ対策の実践－」『千里金欄大学紀要』、第8号、2011、pp.59-67.
- 鈴木純江・鈴木聡志「いじめられ体験を持つ予備校生に対するカウンセリング－エンパワメントの観点から－」『カウンセリング研究』、第39巻、第1号、2006、pp.49-58.
- 鈴木純江・鈴木聡志「いじめの被害者に対する支援－エンパワメントアプローチによるカウンセリング適用と検討－」『カウンセリング研究』、第41巻、第2号、2008、pp.169-179.
- 高野弘幸「いじめ問題と子どもの心のケア」『京都光華女子大学研究紀要』、第45号、2007、pp.187-210.